虹色ライフ

紫焔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色ライフ

【Ｎコード】

Ｎ０２４７Ｆ

【作者名】

紫焔

【あらすじ】

幼馴染みの上総（カズサ）、右近（ウコン）の凸凹コンビを取り巻く学園生活のお話です。

●始めまして、コンニチハ●（前書き）

注意！！この小説には同性愛の表現が多少ある為、嫌悪又は苦手な方は閲覧を御遠慮下さい。

●始めまして、コンニチハ●

●始めまして、コンニチハ●
高校生になった。
そんな男子二人、上総（カズサ）と右近（ウコン）を取り巻く学生スクールライフは結構普通だった。
二人は昔から・・・良く言う
「切っても切れない仲」であり、小・中、更には高校まで一緒という気持ち悪い位一緒の人生を過ごして来た。しかも進学した学校がエスカレーター制の結構頭の良い学校だったので大学も一緒になる予定だ。
「・・・クラス一緒は初めてだよな？」
「だよなっ？イイコトありそー！！」
満面の笑みで返す山崎右近は脳天気・若しくは血気盛んな性格で結構問題児扱いをされてきた。一昨日の始業式でも染めてきた茶髪とピアス姿で、生活指導で有名な教師に追い掛け回されていた。
一方の結城上総はトップクラスの頭脳を持つ男子だ。
天は二物を与えたらしく、顔も良い。昨日は下駄箱にラブレターらしきものが数枚入っていたし、女子から逃げるのに四苦八苦していた。新入生は入ってすぐにテストを受けるのだが、その結果でクラス分けが決まった。少し遅い気もしたが、右近が居るなら安心出来た。どうも女子からの攻撃が激し過ぎて仕方ない気がする。
「上総ラブレター貰ったんでしょ？三組の赤木さん。美人だって！！」
「知らない。読まずに食べた」
「勿体ねー！！高校生らしく恋愛とかしよーよ！！上総カッコイイんだからさぁ！！」
「同じ顔に言われたくない。つか、右近のが性格良いからモテんじゃねぇの？」

「え、俺？」
意外そうな顔をする右近に上総は頷いた。
二人は全く違う見た目と性格だが、顔は全く同じだ。ドッペル何とかで言う
「もう一人の自分」のようだと周りは気味悪がったが、上総も右近も気にしなかったのは、お互い性格が合ったからだろう。
「三日間会わないだけで随分変えて来たな」
「でしょ？頑張っちゃった」
「可愛い可愛い。周防姉だろ、染めたの」
周防（スオウ）と言うのは右近の姉で、大学二年生。ミスコンに選ばれる位の美人で、双子の兄・聖徳（セイト）が居る。こちらもモデル勧誘の耐えない男で、右近はそんな美形一家の次男坊だ。
「すお姉酷ぇんだぜ！？俺はアッシュブラウンにしてくれっつったのに、ハニーブラウンにしやがってさぁ！！」
「良く解ってんじゃん、周防姉。聖徳兄は銀メッシュ？」
「んーん。今は黒メッシュに赤。落ち葉みてぇって言ったら４の字固め食らって・・・」
聞くだけで想像出来る山崎一家に上総は堪え切れずに吹き出した。
明るい茶髪を摘んで頬を膨らまし、話題を変えんとばかりに別の話を始める。
「つか、部活どうする？また文芸とか化学部？」
「どっちも無かった。文芸は女子ばっかだし、化学部は既にオタクの領域。俺には無理デス」
「あっはっは！！俺みてーに運動部にすれば？」
「面倒。大会とか」
二人の目の前にある
「部活仮登録用紙」は未だ白紙だが、右近は既に決めている部があるらしい。
「何やんの？」
「弓道！！ほら、背の高い先輩が声架けてくれたじゃん！！」

「・・・あー、桜宮先輩、だっけ？サクちゃんとか呼ばれてた」
「そうそれ！その人が今朝声かけてくれてさ、仮入だけでもどうだ？って」
「熱心な事で」
女子に人気のありそうな優男だったのは覚えているが、それ以外覚えていない。
運動するのが好きな右近はこれまでずっと少林寺拳法を習っていたので体力はかなりある。先輩がその力量を見破ったのかどうかは知らないが余程右近が気に入ったのだろうとは察しがついた。
「なぁやろうよ弓道！！週三で大会はあんま無いし！バイト出来るじゃん！」
「え～？俺別に勧誘されてないし」
「ひねくれるなよー！！別に仮入だけでもさぁ」
実際に仮入部だけで入部はしないと言う生徒は多い。バイトや委員会など色々あるだろうとは思うが、まだ見ていない部もある。
「・・・仮入だけな」
「やった！じゃあ書いて書いて！！」
特に気になる部があった訳でも無かったので、結局右近に言われるまま弓道部に仮入部をする事になった。
●○●○●
クラスに馴染む為に、学校が始まって最初のホームルームは殆んどが自己紹介などに当てられる。上総と右近のクラスも例外では無く、歴史担当の谷教諭は面白い事をしてくれた。
正直に言えば、上総は苦手な分野だ。
「じゃあ、この用紙にメッセージを埋めて貰ってね」
渡されたＡ４紙には生徒の数だけ四角が囲まれて居て、これを埋めろというものらしい。
人付き合いは苦手では無いが、どちからと言えば苦手な上総は前の席に座る右近を見た。後頭部の視線を感じとったのか違うのか、振り返った右近は予想通り楽しそうな顔をしている。

「やばくね！？扇ちゃんナイスアイディア！！」
「こら右近、先生を扇ちゃんって呼ぶなー」
「扇ちゃん今日もキレイだよー！！」
扇（オウギ）と呼ばれた谷教諭は満更でも無い顔で
「さっさと動け」と笑った。爽やかな顔に高い身長で入学当時は驚いたが、昔はモデルのバイトをしていたらしい。整った顔をしているし、数学教諭の佐々木教諭を始めとした独身教諭が狙っているのも無理は無い。因みに今年で27になるらしい。
「扇ちゃん、もっと楽なの作ってくれりゃ良いのに」
「女子がチラチラこっち見てるぞ？」
「ヤダ。キキタクナイ。・・・あ、ここに書けよ右近」
「んじゃ上総はココね」
お互い用紙を交換して書いていると、二人の間に紙が割って入った。
「これ、書いてや」
「？誰？」
「わ、バカ！！」
素直に相手に聞き返す右近に上総は慌てたが、聞かれた相手は可笑しいそうに笑っただけだった。小さい背丈だが、気は大きいらしい。
「武田雅景や。よろしゅう」
関西弁で自己紹介する雅景（マサカゲ）なる男子の後ろには、ヒョロリと背の高い男が立っていた。
「僕のもお願い出来る？三河アーサーへ、って」
金色の髪を後ろで邪魔にならない様に縛った男子は、ハーフなのか白い肌に緑がかったブルーアイが綺麗だった。見惚れている右近の頭を軽く叩くと、二人の方に上総は自分の紙を渡した。
「結城上総。・・・ヨロシク」
「俺は右近で良いよ！！俺のも書いて書いて！！」
そっぽを向く上総の紙を受け取り、雅景はプッと吹き出した。
「何やお前、照れ屋さんかい」
「違う。慣れないだけだ」

「それを照れ屋言うんやろ！！ハハッ、オモロイなぁ上総は」
明るく笑う雅景にムッとしたが、優しく呼ばれた名前に少しホッとしたので許す事にした。
「上総は女子にモテモテやん？どんな性悪か気になってんけど、全っ然ちゃうんやなぁ」
「でしょ？寧ろ女子苦手？みたいな所あってさぁ」
「勿体ないわー！！」
「だよねー！？」
意気統合した右近と雅景を尻目に、上総は目の前に居るアーサーに何か話かけるべきか悩んでいた。アーサーは上総の用紙に書き込みながら、クスリと笑った。
「別にいいよ。無理に話さなくても」
「えっ？」
用紙を差し出し、アーサーは上総の目を見て優しく微笑んだ。
「元々話すの苦手でしょ？僕は喋らなくても一緒に居て楽しいなら良いんだ。気を遣うならそれは友達じゃないだろうし」
何か悟りを開いているようなアーサーの台詞に上総は関心しつつ、苦笑した。いかに自分が付き合い下手なのか気付かされた気がしたのだ。
「そんなに分かり易いか？」
「雅景とは逆だろうなって思ってた」
「・・・俺、目立つの苦手なんだよ」
「それも知ってる。入学式の新入生代表、笑い堪えるの必死だったよ僕」
「そりゃ無いだろ。頑張ってたのに」
他愛ない話をしながら、四人はその後もクラスメイトに用紙を交換して貰い課題を達成していった。
「じゃあ雅景は大阪に居たんだ？すげー、生関西人」
「何やそれ！居た言うてもチビの時や。一家皆で関西弁喋りおるから俺にもうつったんや」

「雅景の関東語、想像し難いな」
「あ、そりゃ酷いで上総！！アーサーも笑うなや！！」
授業で親しくなった事もあり、四人は一緒に昼を食べる事になった。やはりどうでも良い事ばかりだが、上総は二人の事を先程の授業よりも知った。
雅景は中学進学前まで大阪に住んでいて、六人兄弟の長男坊。父親の腕で育てられた兄弟は皆元気で、今は祖父母と一緒に八人で過ごしている。
アーサーはイギリス人と日本人のハーフで、高校生になるまではイギリスに居たらしい。アーサー自身日本文化に興味があり、留学して来たらしい。今は祖母と二人暮らしをしていて、谷教諭とは遠い親戚らしい。
「扇は昔から歴史の本ばっか持ってた。あ、因みに扇は僕の従姉妹。父のお姉さんが大分歳離れててね」
たまにアーサーと祖母を気にして遊びに来る辺り、優しい面もあるらしい。
「でも何で右近の方には女子来ないんや？」
「あ、俺も思った！！ねぇ上総、何でこーも違うの？モテる薬とか使ってるの？」
「使ってねぇし」
弁当を食べながら上総は眉間に皺を寄せた。渡せるものなら渡したい、この異様なまでの人気。
「女子はね、少しでも謎めいてる男が好きなの」
「え！？アーサーそれ本当！？」
「うん」
笑顔で頷くアーサーは元々が綺麗な顔立ちなので彫刻や絵画に出て来そうだ。
「それと、あとは・・・」
急に立ち上がり、アーサーは廊下に出た。見ると、廊下で女子がノートを拾っている。落としたのだろうが、量が多い気もする。何を

するのかと思えば、女子と一緒にノートを集め始めた。
「はい、これ。大丈夫？」
「あ、ありがとう」
「随分多いけど、大丈夫？」
「うん、職員室までだから」
「気を付けてね」
気付くと別の女子がアーサーと女子の間に入り、半分を持って立ち去った。
「すげー！！アーサーやべぇ惚れる！！」
戻って来たアーサーに開口一番叫んだ。
「でしょ？優しさも大切って事」
「何やアーサー、偉いべっぴんな子やったけど狙っとんのか？」
「え！？そんなに美人だったの！？」
「大人しそうな・・・沖田さんだったかな。仮クラスで隣だった」
上総が名前を言うとすぐに右近は誰なのかすぐに解ったらしい。
「僕は坂本さんの方が気になるな」
「誰やそれ」
「後から来て僕をナンパと勘違いしてた子」
「あぁ！陸上部の子？」
「短距離ルーキー。かなり可愛いよ、タイプなんだ」
包み隠さず言い切るアーサーに右近と雅景はそれこそ女子の様に奇声を上げた。上総からすれば大胆過ぎて呆れる。
「いいなぁ、皆好きな子居てさ。俺達も恋しよーな？」
「俺はまだいい」
冷静過ぎる上総の台詞に右近は
「つまんねーの！」と思ったままを口にしてチョップを食らわした。

●始めまして、コンニチハ●（後書き）

こんにちは、紫焔と申します。この度は「虹色ライフ」を読んで頂きありがとうございます。何だか一話目から凄い登場人物数（大小合わせて９人！）で正直驚いていますが、良ければ次回も読んで頂けると嬉しいです。それではまた次回、会える事を願って。

●やってみようよ、ホトトギス●

●やってみようよ、ホトトギス●

「そういや、前に仮入部届け出しただろ？あれ今日からだから、部活ある奴は頑張れよ」

朝のホームルームで伝えると、谷教諭は生徒のこれからが楽しみだと言わんばかりに笑って出て行った。途端に煩くなる教室の中、上総（カズサ）は溜め息を溢した。それを聞き逃す訳は無く、右近（ウコン）が首を傾げた。

「上総ぁ、どうした？今日から楽しい部活動デスヨ？」

「楽しんで下さい」

「なんだそれー！！」

誘われるまま、弓道部に入ったは良いものの上総は右近の様に体力が人より高い訳じゃ無い。高いと言えば高いが、それでも小さい頃から少林寺憲法なんてやってる右近よりは全く無い。

「何や右近。上総と喧嘩したんか？」

近付いて来る雅景（マサカゲ）に首を振り、右近はしょんぼりと椅子の上で体育座りをした。

「俺が我が儘言ったから怒ってんの？」

「・・・・・・」

「右近、それ俺でもやらへんで」

膝の上に顔を置くと上総を見上げてくる阿呆を怒る気など出なかった。

「右近の事甘やかしてる上総もいけないんだよ。だから右近は気にしなくていい」

「アーサー！今日は三編み？」

「お婆ちゃんがしてくれた。似合う？」

「可愛い～！！」

アーサーの姿を見て元気になる辺り、餓鬼過ぎると上総は思った。が、結局世話を焼いて来た人生を今更変えらるとも思えなかった。

昼に食堂に行こうと誘ったのは雅景で、四人で移動する最中も話が盛り上がった。
「右近と上総は弓道やろ？アーサーは？」
「僕は吹奏楽」
「えぇ！？アーサー楽器出来るの？」
頷くアーサーに関心したのは右近だけではなく、上総も驚いた。
「なぁなぁ！何やるん？」
「本当はギターなんだけど、サックスとバイオリンも出来るから」
「ギターなら軽音部が良いんじゃないか？」
「僕、クラシックの方が好きだから。あ、ほら着いた」
指差すアーサーに続いて前を見ると賑やかな食堂があった。白を基準にした綺麗な作りで清潔感が溢れる。
「何にしよる？俺Ａランチとプリン！！」
「俺はオムライスカレー」
「僕は日替わりロコモコ。右近は？」
「うーん・・・月見うどんかな？そりゃ」
架け声と共にボタンを押す右近を見てから、各々のカウンターに立った。上総、雅景とアーサーは定食・ご飯もの。右近だけ麺類のコーナーになり一人寂しく出来るのを待っていた。
「あ！桜宮先輩！！」
見覚えのある後ろ姿に右近は躊躇わず近付いた。声を掛けられた桜宮の方は驚いた顔をした後に右近に振り返った。
「・・・山崎か。元気そうだな」
「右近で良いっすよ！先輩は彼女とですか？」
「いや。彼女居ないから」
「え！？以外・・・あ」
思った通りを口にして、右近はマズイと自分の口を隠した。いつも上総に怒られる考え無しの言葉に気付き、桜宮を見上げた。
「・・・っくく」
見ると桜宮は口許を隠し、更に声を殺して笑っている。顔を背けて

いるのでどんな表情なのかは判らないが、笑いが収まらないのには流石に恥ずかしくなった。
「な、何すか！そんな笑わないでも良いでしょ・・・」
「いや、悪・・・っフフ・・・駄目だ、苦し・・・」
「もー知らないっすよ！つか恥ずいです！！」
「悪い悪い」と頭を撫でられ、右近は膨れた頬のまま桜宮を睨んだ。まだ笑いが途切れないのか、微笑んだ顔で右近に謝った。
「本当にごめん。・・・じゃあな」
「・・・っす」
自分の分が来ると桜宮は友達なのか男子グループの中に座っていた。箸や色々なものを用意しながら、右近は首を傾げた。
（俺から見てもカッコイイのに、彼女居ないんだ・・・世の女子は見る目が無いなぁ）
溜め息を溢したが、次にはハッとなって考えを改めた。
（いや、もしかしたら居るけど遠距離中とか？！もしくは身分の差とかで？！）
右近は昨日みた時代劇の話を思い出し、現実では有り得ない事まで想像していた。
「あ、来た来た。遅かったやんなぁ」
「なぁ雅景。身分の違う恋って叶わないもの？」
「は？何言うてるん？天皇様とでも結婚する気かいな」
「え！？いや俺じゃなくてさぁ！！」
しどろもどろに説明する右近に三人は首を傾げた。
「知らんがな先輩の事なんか。ちゅーか俺知らんしその先輩」
「酷い雅景！！・・・でもやっぱ不思議だよねぇ」
「何が？」
問いかけるアーサーに右近はうどんをすすった後に続けた。
「だってあんなカッコイイなら彼女の一人二人は・・・」
「二人はあかんやろ。でも右近が惚れる先輩ってどんなん？上総」
「？何が」

オムライスを黙々と味わっていた上総は不機嫌そうに雅景を見た。
食には煩い上総は食堂をなめていたと軽く反省をしていた所だ。
「確かにカッコイイ人だったよ、ミステリアスで。でもカッコイイからって彼女が居るとは限らないだろ？」
「上総みたいに女嫌いとか？」
「別に嫌いじゃねぇよ」
勘違いしているアーサーにきっぱりと返し、続きとばかりに右近が続けた。
「上総は構われるのが苦手なだけで、好きになったら結構凄いんだよ？大胆でもうっ！！」
「彼女居ったん！？」
「んーん。中学の時に教育実習で来てた学生」
「わ、馬鹿！！」
流石に恥ずかしくなって右近の口を塞ごうとしたが言い切った後では全てが遅かった。育ち盛りの男が四人揃えば、色恋話に花が咲かない訳が無い。
「美人だったの？幾つ差？」
「美人美人！！中二の時に相手が２１だから・・・七つ？」
「年上キラーかいな上総ァ？」
「ウルサイ」
「良く言うよ。頑張ってメアドも聞き出してたみたいだし？まぁ相手にされなくて駄目だギャ！！」
足を踏まれて叫ぶ右近に周りは慌てたが、上総は黙々と食事を続けた。
●○●○●
「足の骨死んだかと思ったよ・・・あー痛ェ」
「何時間前の話だよ」
放課後になり、右近にとっては楽しみな、上総にしては面白くない部活動の時間が来た。と言っても挨拶だけして帰るつもりだったし、新人が出来る事など度が知れている。

「弓道部」と書かれた看板があった場所に上総は初めて来た時も驚いた。異様に凝った作りで、部室も畳が敷いてあった。
「ちわーっす」
「ちわ」
横開きの扉を開くと直ぐに声が返って来た。下駄箱があってすぐに横に部屋の入り口があるので、中から誰か来ないと気まずい。
「はいはい」と降りてきた袴姿の男子に、上総と右近は頭を下げた。
「結城上総です。お世話になります」
「山崎右近です！宜しくお願いします！！」
「ははっ。礼儀正しいな。まぁ顔上げなよ、上総と右近だっけ？」
柔らかい物言いに顔を上げると、穏やかな面持ちの男子が腰に手を当てて二人を見ていた。
「俺は副部の小野大智。大チャンで良いからな・・・っと、サク？」
大智（ダイチ）と二人のやりとりに気付いたのか部室から顔を覗かせた。
「右近がどうって？・・・あ」
「あ、桜宮先輩！！」
「・・・ども。結城上総です」
自己紹介をしていないのに気付いた上総が頭を下げると、相手も頭を下げた。
「桜宮左京だ。一つ上だけど気にしなくて良いから」
「左京って言うんすね、何か似てるかも、なんて」
はにかむ右近に左京（サキョウ）は満更でも無い様に頷いた。もう部活に行くつもりなのか、手には道具が握られている。
「この後は？」
「え、暇ですけど・・・」
「・・・見てくか？」
愛想は良く無いが、後輩に好かれようとしているかの様な行動に上総は好感を持てた。右近は元々人を嫌う事が少ないので直ぐに頷いた。
左京に続いて行きながら、右近は左京の姿を上から下まで見た。

「・・・何か付いてるか？」
「え？あ、違います！袴、カッコイイなぁって」
「半年経てば毎日袴だぞ」
「違いますよ、先輩が！」
「俺が？」
己を指差す左京に右近は頷いた。
「先輩気にしてる子、俺結構知ってますよ？なのに彼女居ないなんてなぁ」
「山崎も女子に人気あるんじゃ無いのか？」
「まっさかぁ！！んなの全部上総ン所っすよ」頭の後ろで手を組み、右近は後ろで大智と話をしている上総を見た。話が弾んでいるのか、珍しく会話を楽しんでいるらしい上総に少し驚く。
「似てるな、双子とかじゃ無いのか？」
「あー、良く言われるんスけどね。違いますよ。もしそうでも構わないし」
「・・・」
不意に目を伏せた右近に左京は悪い事をしたかと思ったが、声をかける前に笑って見せた。
「俺と上総だから絆は凄いっすよ！！二人三脚とか出たらダントツっス」
「・・・それは楽しみ」
口許にだけ笑みを乗せ、左京は道場の扉を開いた。広い室内に感嘆を漏らしつつ、二人は指定された場所に正座した。
「弓道がどんなのかは知ってる？」
「真ん中の的狙うんすよね？」
「そ。あ、ほら、我らがエース・那須与一（ナスノヨイチ）が・・・」
大智が説明する前にヒュンッと風を切る音が鳴り、次いでドス、と的に命中した矢が衝撃で揺れていた。驚きで声が出ない。
「因みにこっちは近的場って言って、もう一つ奥にあるのが遠的場。遠的場は一つしか的が無いから順番に使うように」

「え、でも今ここだけで広いって思うのにまだ長い所があるんすか！？」
「俺もやっと的の側まで行くようになった位。今はサクと顧問しか使って無いよ」
「顧問？」
「おー、やってるか与一と大智！」
噂をすれば、なのか顧問らしき人物が扉を開いてやって来た。与一と呼ばれた左京は頭を下げ、大智も軽く挨拶をした。
「扇ちゃん！！」
「よぉ右近。上総も来てたか」
担任の扇（オウギ）こと谷教諭が弓を持ったまま右近と上総の頭を撫で、目の前にヤンキー座りをした。
袴だからだろうが、あまり女性がしていい姿では無いと上総は思う。
「斎藤と片倉は来なかったか？」
「そっすねぇ。この二人だけで暇だしナンパしてました」
「大智ぃ、その調子で彼女とも仲良くな？」
「何でんな事知ってんの！？」
慌てる大智に笑いかけ、谷教諭は大智を払い除ける様に手を振った。大智も弓を持って来ていたので中（あ）てたいのだろう。
「よく来た。この三年間、しごいてやるから覚悟しな？」
「まだ仮入ですけど」
「あっはっは。まぁ顧問が私だったんだから仕方ないだろ！諦めな上総！」
肩を力強く叩かれ、上総は溜め息を溢した。元気な教師は人気があるが、上総は余り構って欲しくない。
「・・・あ。明日の課題忘れた」
谷教諭の顔を見たからか、立ち上がった上総は谷教諭に頭を下げた。
「右近。荷物頼んだ」
「はいはーい」
手を振る右近を見ずにさっさと道場を出た。

部室がある棟から更に奥に入った場所にある弓道場から学習棟・・・普段勉学に励む教室がある棟までは遠い。
小走りになりながら校庭の脇を通り過ぎようとして、足が止まった。
「ねぇ、君！！ちょっといい！？」
言うが早いか腕を引っ張られてしまい、その相手が怪しいので上総は半歩、身を退いた。

●やってみようよ、ホトトギス●（後書き）

那須野与一・・・日本史に登場する弓の名手。・・・だったと覚えています。先輩の武勇伝は後程。そして右京、とっても女々しくなりがちで困ってる作者でした。また会える事を願って・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0247f/

虹色ライフ

2010年10月16日05時06分発行